

親子関係における若者の「自立」—質的調査による考察

藤井 吉祥

1 はじめに

社会構造の大幅な変容のなかで、今あらためて「大人になること」が問い返されている。「大人になる」とは「自立」という課題を果たしていくことと捉えうるが、親子の関係はその重要な一側面である。ただ、日本における若者の親子関係の移行に対する社会学的な調査は90年代に入ってようやく始められたばかりであり、質・量ともにまだまだ途上にあるといえる。本稿では、親子関係における「自立」について事例に基づき考察を深めるとともに、これまでの日本の親子関係の移行調査において共有されてきた「依存から自立へ」という前提図式、つまり「自立」を「依存」と対置して捉える認識を質的調査のデータに基づき問い直す。近年では「自立」という語が政策的にも至るところで多用されているが、特定の意味内容における「自立」のみが規範化され強要されてしまう状況も生じており、安易に「自立」を用いることには慎重にならざるをえない¹。もちろん「依存から自立へ」という図式はあくまで分析枠組みであり、実態をそのまま意味しているわけではないが、これがデータを離れ言説化していく過程において、実体的に扱われ規範化してしまうという場合も少なくないのである。

(1) これまでの知見

それ以前まではライフコース研究など、全体的な視座における一部分としてしか捉えられてこなかった若者の親子関係に対し、1991-92年に宮本・岩上・山田・米村による調査が試みられ、若者の親子関係についての先鞭がつけられた(家計経済研究所1994ほか)。その後、若者への社会的関心の高まりもあり、さまざまに調査が試みられていく²が、なかでもより深く若者の移行について考察を進めているのが宮本(2004)である。そこでは若者の親子関係をとりまく諸領域を広くカバーする精緻な先行研究レビューとともに、日本の若者がおかれた社会状況についての整理および実証的なデータ分析が展開され、その特徴を「親への依存の長期化」としている。「自立しない／させない」という若者や親の意識についての比重が強かった宮本ら(1997)に比し、若者が「自立できない」状況、すなわち社会的文脈により焦点が当てられ、親子の相互交

渉と社会構造の結節点として親子関係の現状が捉えられている。そして「価値観や活動が安定し、自分の人生を主体的に設計する自覚があり、リスクに対処するための知識や技量が基本的にそなわった状態」(宮本2004; p.234)を成人期の定義としつつ、若者の自立を支える社会システムの確立の必要性を提起している。

「自立」にかかわって本書(宮本2004)では、若者の親子関係上の移行を『親への依存』から『親からの自立』への転換(p.14)と捉える視座を基本としている。そして実際の分析過程においては、経済関係・就職・離家・結婚などといった各種イベントの有無が、若者の実態把握のための暫定的な指標として用いられ、それを規定する諸要因を測定する、という作業が主要となっている。分析の目的としてはあくまで実態把握にあり、「学卒・就職・結婚などの規範的イベント」により定義されてきた「従来の成人期の定義」を問い直すという課題も据えられている(p.239)のだが、「依存から自立へ」という図式を念頭におきつつ分析を見た場合、やはり〈正社員となり、親元を離れて暮らすとともに結婚する〉などといった上記項目の達成が「自立」の理念型として浮かび上がってしまう。こうした視座・分析は、その他の調査にもおおむね共通するものであり、日本における調査・研究の現状を指し示しているといえる³。

(2) 「自立」概念の問い直し

一方、上記の「依存から自立へ」という「依存」と「自立」を対立的に捉える枠組みに対し、再考を促す調査結果も出されている。家計経済研究所調査(1994)の10年後を検証するというかたちで実施された岩上らによる調査(2005)では、本人の認識における「経済的／精神的自立」を果たしているかどうかという項目とは別に「経済的／精神的に(親へ)頼る／頼られるか」についての問いが新たに設定されている⁴が、その結果からは「頼る」ということが「自立」の反意語としての「依存」を意味するわけではないことが明らかにされている。それは、「精神的に頼る／頼られる」は「精神的自立」の有無とは関連が見られなかったという点に端的に表れているが、一方でより具体的な項目となる経済面にかんしても指摘できる。「経済的に頼る」かどうかは本人の「経済的自立」

の有無と強く相関している（「自立」している方が頼らない）のに対し、「経済的に頼られる」かどうかは本人の状況（「自立」含む）とはあまり関わりがなく、親の年収および本人の学歴が低いほど親に頼られるという傾向がある。その帰結として、本人が低収入・低学歴かつ親も低収入の場合には、「経済的に頼る」と同時に「経済的に頼られる」という双方向の傾向が見られることを明らかにしている。

また、イギリス・ノルウェー・スペインの若者たちの離家 (leaving home) について聴き取り調査を行なったホールズワースら (Holdsworth & Morgan 2005) は、若者たちの離家と親子関係について分析し、離家規範の強いイギリス・ノルウェーにおいては居住形態に表される状態としての「親からの自由」(freedom from parents) が、逆に家族との同居が長いスペインにおいては日常生活に表される行為としての「したいことができる自由」(freedom to do) が重視されていることを明らかにしている。そこには国家の福祉体制の相違やそれとも連動した文化的相違が強く反映されているが、その違いも含めたうえで、「離家」を「依存から自立への進展 (movement)」ではなく「異なる相互依存 (inter-dependencies) 間での移行」として概念化することを提唱している。

さらにこうした「自立」にまつわる概念の問い直しは、他領域においてはすでにさまざまに試みられてきている。心理学の領域では、乳幼児期の母子関係を端緒として「依存」と「自立」の関係が問われ、両者を対置するのではなく、依存の形態変容として捉えるという発達論的枠組みがその臨床的有効性とともにも早いうちから提起されている (江口 1966)。そして「依存 (dependence/-y)」という概念について、諸領域を横断的にレビューしているジョンソン (Johnson 1993) によれば、「依存」を否定的な経験とするのは西欧文化特有のものであり、近年では「依存」に対し、より相互行為的な「相互依存 (interdependence/-y)」という用語が用いられるようになってきているという。この両者を合わせて考えれば、「依存から自立へ」という図式は「依存から相互依存へ」と置き換えられるといえよう。

また「自立」にかかわって、それを英語に置き換えてみた場合、それは "independence (独立)" および "autonomy (自律)" となる。社会的文脈の強い「独立」と心理的・精神的意味あいの強い「自律」という腑分けもあるが、渡邊 (1990) は「独立」を「他者を頼らない・他者に依存しないこと」(「消極的自立」)、「自律」を「自己判断・自己決定・自己統制に基づき、時間的展望をもって主体的に自己自身の力でやること」(「積極的

自立)と規定し、「自立」を二つの下位概念に分けている。この両者の腑分けは、ホールズワースらの見出した「親からの自由」「したいことができる自由」という区分に該当するといえる⁵。ここで「独立」とは、「依存 (dependence)」の対極を意味しており、親元に暮らし親に依存してきた子ども期に対し、離家を果たして親との分離を達成できるようになることを指している。一方の「自律」とは、親からの統制を脱して行為判断できることを指すのみであるため、親への「依存」が統制や過度の干渉を伴わない限りにおいては親と同居したままでも果たすことが可能である。あるいは「自律」を果たすためにこそ、経済的負荷などを伴う別居ではなく、戦略として同居する場合も生じうるだろう。本稿では、この両者を分析軸として用い、若者の親子関係における「自立」についての考察を進めていく。

(3) 調査概要と全体像

こうした調査・研究動向から見えてきた「自立」概念の再考という課題に対し、本稿では筆者が関わっている経年的インタビュー調査である「高卒者の進路動向に関する調査」から明らかにする (乾ほか (2003、2005、2007)・乾編 (2006) など参照)。親子関係に焦点を絞った調査ではないものの、移行途上にある若者の全体像を把握するという主旨に則った調査であり、家族や親との関係も重要な項目のひとつとして位置づいている。対象者の人数や地域的・階層的偏り、聴き取りも子どもの側にしか行っていない点など、調査上の制約も大きいのが、複雑さを増す今日の移行過程をきちんと掴むという点で、経年的インタビュー調査のもつ意義は少なくない⁶。

本調査は、東京の多摩地区普通科「中位校」(A 高校)と下町の普通科「底辺校」(B 高校)において 2002 年度時点で高校 3 年生だった若者たちを対象としている。高校 3 年生時の 1 回目調査 (1) は 89 名 (A 高校 39 名、B 高校 50 名) に対して聴き取りを行ない、そのうち継続調査に応じてくれた 53 名 (A :23、B :30) に対して 1 年後の 2003 年度に 2 回目調査 (2) を行なった。さらに卒業 3 年目となる 2005 年度に 3 回目調査 (3) を実施し、39 名 (A :18、B :21) に話を聞いた (以下、引用部末尾の数字 ; (1)(2)(3) はそれぞれの調査時期を指す)。調査は現在もまだ継続中であるが、これまでの 3 回の調査から見えてきた部分において展開する。なお、対象者の氏名はすべて仮名である。

まず全体像を示しておく、対象者は 3 回目調査時点で高校卒業 3 年目であり、対象が 20 代全体から場合によっては 30 代にまでわたる先行調査に比べ、圧倒的に

低年齢である。また高校の偏差値ランクでいえば「中位校」と「底辺校」に限られており、学歴的に中間層以下の若者たちの姿であるとともに、最下層となる中卒・高校中退者は含まれていない。

そして本調査を親子関係および家族関係の変化に注目してみれば、あくまで相対的にはあるが、正規雇用就職への参入あるいは離脱が強く影響していることが分かる⁷。このことは、収入の多寡が関与している部分も少なくないが、そのみにとどまらない点もうかがえる。この点が、本稿で注目する第一の点である。

親子関係にとってもう一つ重要な側面となってくるのが、家庭階層である。とりわけ家計状況は、高校生活から高卒後進路、および卒業後の生活まで若者の移行に強い影響を及ぼしている。そして3回目まで調査を継続している39名中、本稿で主要に注目する学卒者は23名だが、生活保護受給家庭が4ケース、ひとり親家庭が12ケースと、在学者（生活保護：1、ひとり親：2）に比べてもより低階層に集中している。若者の自立についての意識を調査した「青少年の社会的自立に関する意識調査」（内閣府2004）では、「経済的自立志向」を抱く者は本人の学業達成の高い者、および親がホワイトカラーである者に偏りがあるという結果も出ており、この層に注目する意義は大きい。この点が本稿で注目する第二の点である。

次節以降では、以上のような職業的移行と親子関係、および家計の苦しさ親子関係という二つの側面に注目し、移行期の若者の親子関係がどのような展開を見せているのかについて、個別ケースのデータを用いつつ示し、親子関係における「自立」について考察する。

2 職業的移行と親子関係

本節では、親子関係の変容に対して少なくない影響を与えていた職業的移行、とりわけ正社員就労に着目し、そこで展開されていた親子関係の移行について追っていく。なお、対象者のうち多くの者が高校在学時からアルバイトを始めており、小遣いの有無など入職による親子関係の変容は高校在学中にもあったであろう。しかし本調査は高校3年次から始められており、それ以前における親子関係の変容については部分的にしか把握できていないという制約もあり、卒業後に着目する。

(1) 入職に伴う地位獲得と保護・干渉の減少

最初に、入職と前後しての関係の変容について触れておきたい。なお、働くということにかんしては、アルバ

イトで働いている場合の入職・離職についても同様であるが、より強く親子関係への影響が確認できた正規雇用への入職・離職を中心に見ていく。

正社員就労にまつわる親との関係の変容を最も端的に表していたのが、正社員として働いていた2回目調査時点の下川彩乃のケースである。彼女は声優になるという夢を抱き、養成所に通う資金を溜める目的で就職したものの、職場環境の厳しさから1年後に離職しており、その過程で親子関係も大きく揺れているケースである（離職後については次項で取り上げる）。高校生のころは、アルバイトやお金の使いかたなどに干渉してくるとともに、声優という夢に対しても否定的な親と対立気味であった下川だが、働きはじめて1年後の2回目調査では、親の言葉の受け取りかたなどに一定の変容も生じていた。働きはじめてからは、長時間労働に伴い親ともにいる時間は減ったものの、逆に話す機会は増えたという。それは会社のことや男女のキャリア形成の差異など、就労にまつわる話が中心で、必然的に現在も働いている父親と話すことが多かったというが、「お母さんも前は働いていたし」(2)と、母親ともそういった話をしていたことがうかがえる。そういった機会を経るなかで、彼女は「二人とも大人なので、自分はまだ子どもですけども、働いているということにおいては、まだ下かもしれないけど、少し目線は同じになったのかな」(2)と感じるようになっていた。

専門学校に進学し、卒業後に正社員として就職した小林俊介の場合、正社員への入職に伴う変容について、「親に認められてきた気がする」(3)と話している。母親から「前は子ども扱いされてた」のが、今の仕事で働くようになってからは「ちょっとした細かいことなんだけど」、反応が変わってきたという。具体的には「(帰宅が遅いときは)メールすぐ来たりとかしてたのが、今でも心配はしてメール来るけど、でも言われかたが、信用してるから気をつけて帰ってきなさいよ、ぐらいいとどまってきた」(3)とのことである。

同じく専門学校進学・卒業・正社員就労という経路を辿ってきた深川陽一郎は、正社員として働きはじめた3回目調査時には「(親に)うるさく言われなくなりました、働いてから」と語っていた。そしてその変化の理由として、「やっぱ金入れてるからじゃないですか？」(3)と答えていた。しかし「働いてから」とはいうものの、すでにアルバイトで月当たり7万円ほどの収入を得ていた専門学校在学時には家には入れておらず、入れるようになったのは学卒後である。さらには一月15万円の収入のうち5万円を家に入れていた彼に対し、より稼いで

いるという姉の場合は3万円であり、収入の差によるものでもない。こうした家計繰り入れの有無の差および額の差からは、彼の家庭においては家にお金を入れるという行為がかならずしも経済的意味合いだけではないことが確認できる。彼の場合における家計への繰り入れという行為は、保護される対象としての「子ども期」を終えたということの具体的な証として作用しているのではないだろうか。

ここで見てきた親子関係の変容は、基本的には親子のごく些細なやり取りの延長線上で捉えられているものであるが、それを「自立」に即せば以下のように整理できる。彼ら彼女らにとって、親との目線の共有や家計繰り入れという行為は、親の認識も加味されたかたちでの「社会人」としての地位獲得を表しているといえるが、それは保護対象としての「子ども」を脱していく過程として「独立」の一端として捉えうる。そしてまた、「独立」と一体のものとして立ち現れている親からの干渉の減少は、自分なりの判断の下に生活を営んでいく領域の増大を意味しており、「自律」獲得の過程と捉えられる。それら両者が正社員として働きはじめることに伴い、同時並行的に生じているのである。

(2) 離職に伴う軋轢と移行の困難

正規雇用への入職が親子関係の移行にとって効果的に作用している様子を見てきたが、ここでは逆に、正社員からの離脱が親子関係に与える影響について追ってきたい。そこには、離職に至る過程およびその後の就労生活における困難がまずあるとともに、それと連動したかたちで親子関係の移行の不具合も生じ、困難が二重化してしまう実態がある。

浜野美帆は、かつて化粧品会社で働いており、メイクで賞を取ったこともあるという母親にあこがれ、高校卒業と同時に美容院に正社員として就職した。そんな浜野に母親も、「やりたいこととかも全部賛成してくれて、すごい協力してくれている」(1)とのことであった。しかし、美容院での仕事はいろいろな面で厳しいものだった。深夜にまでわたる「研修」など、仕事そのものの辛さはさほど苦ではなかったというが、干渉し過ぎな人間関係、変えようのない声質への叱咤、アレルギー性の手荒れなどに耐えかね、1年後の6月に離職した。そしてその後はアルバイトを転々とし、かつてのような将来への展望もなくし、自らを「プチニート」と呼び責めていた。

そして母親との関係についても、大きな違いが現れていた。美容院で働いていた2回目の時点では、仕事の悩みの相談を持ちかけるなどもしていた彼女であったが、

3回目では母親に対し、「思ったことが素直に言えず」「話す気がなくなっちゃう」(3)のような状態だという。そしてアルバイト生活を続けるなか、きょうだい間での家計繰り入れの額を比べられ、「あまりにも金額が違って」「なんでお前だけ」(3)と非難を浴びせられていた。こうしたやりとりの背景には、母子家庭でそれまで生活保護を受給していた彼女の家庭の逼迫した家計状況があるが、浜野もそれが分かっているからこそ、「うち(=私)がぐうたらだから」と自分を責めたてる。そして母親からは「おまえの悪い癖は急に嫌だと思ったらすぐ辞めて、それで仕事がないっていう状態」と指摘され、「給料が途切れると(家計が)困る」から、「辞めるんだったら次の仕事を探してから辞めて」(3)と言われているが、彼女からすれば「もう無理っくらい、なにかと我慢して我慢して」(3)という状態を超えたところで、糸が切れたように辞めてしまう、とのことであった。彼女にとっては、家計の状況や親の叱咤があるからこそ無理を押しがばってしまうのであるが、それがかえってスムーズな転職行為を妨げてしまっているのである。そんな悪循環を呈している家庭から逃れるように、彼女は「第二の家」と呼ぶ友人宅で多くの時間を過ごし、同じく不安定な就労生活を送っており、気持ちを分かち合える友人とその家族に相談事をしたりしている。

さきほど労働者としての対等性を獲得しつつあるケースとして下川を取りあげたが、彼女のその後もまた多難なものであった。問題点山積の職場環境に耐えかね⁸、就職してからおよそ1年後の2月、彼女はこの会社を離職した。そして離職後、お金を稼ぐためにアルバイトを探すものの、思うように採用もままならず、仕事のない時期が長く続くようなこともたびたびだそうである。一時期は養成所にも通っていたが、貯金もなくなり足は遠のいており、一緒にインタビューを行なった友人は、下川を遊びに誘うことも、彼女にお金がないために躊躇しがちだという。結果として彼女は家にいることが多くなっており、親とともにいる時間は増えているのだが、正社員として働いていた2回目とは違い、さしあたり共有可能な具体的・社会的文脈を失ってしまった。

そんな状態において、親との関係はふたたび悪化していく。話す機会が増えたという2回目に対し、「うちの食卓は、みんなで瞑想してる感じ」(3)といった表現もなされ、家庭のなかに「言葉のない圧力」(3)が蔓延しているという。離職直後に採用が決まったアルバイトに対し、家から遠いことを理由に母親から反対され、断念したこともあった。声優をめぐる対立はこれまで同様で、養成所については親に話していない。さらに父親

からは、「結婚して子どもを産めばいい」とか「農家の嫁に」(3)など、彼女の望まぬ価値観も突きつけられている。それに対し彼女は「自分の価値観と親が違うからいらいらしちゃう」ため、「家にいるからダメなんだ」「早く家を出たい」(3)との思いを強めている。彼女の家は親子3人川の字に寝てる(2)というように、親との距離を保てるような居住空間でもない。そして親との距離を少しでも保つために、彼女も浜野同様、つらい気持ちを理解し受け止めてくれる友人宅に出入りし、多くの時間を友人と過ごしている。

以上の二人に共通するのは、正社員就労というかつての「標準」にいったんは乗ったうえで、実態としての職場環境の劣悪さによりはじき出されたのち、家庭における居場所すらも失いかけているという苦境である。そして正社員という「標準」から外れた状態に対しての遇されかたこそ異なるものの、いずれにしても家庭は彼女らの現状を理解してくれるものとはなりえていない。そして離家など親からの分離を求める両者であるが、かつての経験から正社員就労への忌避感もあり、分離としての「独立」はあまり現実的ではない。彼女らが抱える苦悩は親からの干渉にあり、当面必要となるのは「自律」の獲得なのである。そして彼女らのとっている友人との関係は、親とのあいだに必要な距離感の担保となっており、ともに、苦しい日常をなんとかしのいでいく(律していく)ための情緒的安定を確保できる場ともなっているのである。

(3) 小括

本節のケースから見てきたのは、職業的移行が親子関係の移行を強く規定している様子であった。以下では、就労にまつわる親子関係の移行・変容を「独立」「自律」という「自立」を捉える二つの視点からまとめ、考察を加えたい。

まず「独立」という視点から見た移行とは、社会人としての地位獲得を果たすことにより、親の保護対象としての「子ども」という立場から、親とは分離・独立した「もうひとりの社会人」として親と対等な立場へと至る過程であった。そして「自律」の場合には、親からの干渉が減少し、自己決定・自己統治の領域が拡大していく過程であった。正社員への移行を果たしたケースにおいては両者が同時に生起し、親との関係も良好に保たれていたものの、一方でそこから離脱したケースにおいては親との関係はこじれ、移行は難航していた。そこで求められていたのは、親の叱咤や干渉などに振り回されることなく、みずからのペースで移行を進めていけるような状況

であった。

以上のような移行の様子は親からの保護・干渉を脱していくという意味で、大筋では「依存から自立へ」という図式が該当するといえるだろう。しかしそこでの「自立」を「独立」「自律」に分けて捉えてみれば、社会人としての「独立」以前の問題として行動・判断の「自律」が優先課題となっているのである。それに対し彼女らのとっている対処の方法に目をやれば、親からの「自立」としての「自律」獲得を、親以外の他者との「相互依存」関係によって果たしていこうとする試みとして読むことも可能なのではないだろうか⁹。

なお、「独立」にかかわる「社会人としての地位」とは、社会的制度的に機能している「標準」の型に即したものであり、先行研究で分析指標として用いられているように就職・離家・結婚などさまざまあるが、本節では正社員就労に該当するといえる。それは親世代の経験してきた「標準」でもあるため、1項下川のケースで見たように正社員で働くことは親との経験の共有を可能とする。しかし雇用の非正規化や労働環境の悪化がかなりの範囲で常態化している現状においては、正社員就労は確保・維持しがたいものとなっている。さらに正社員という地位は男性に偏った配置となっており、下川の父親が示唆するように従来型の「標準」にはジェンダーバイアスがかかっているという側面もある。いずれにせよ、「標準化」にはこうした「外部」が常に存在してしまうという点は不可避ながら、その外部とのズレを現実的に即したかたちで修正していかなければならないのである。

また「自律」にかかわって、親からの働きかけが抑圧含みの「干渉」となってしまう要因には、たんに「意識の問題」としてのみでは片付けられない問題も含まれている。それは浜野のケースにあるように、職業的移行の困難をカバーできるだけの家計のゆとりのなさであったり、下川のケースのような結婚に対する認識の違いであったりする。家計状況については次節にて詳述するが、認識の違いについては親と子のあいだの世代差、つまりは移行を経てきた時代状況の差が反映されている場合が少なくない。社会環境の変容に伴い生じてくるこうした認識のズレもまた、軋轢なきよう修正していく必要もあるのである。

3 家計の苦しさとの親子関係

次に本節では、家庭および親の状況が若者の移行に与えている影響を確認するとともに、苦しい家計状況におかれた家庭における親子関係について詳細に追っていく。

(1) 高校生活と高卒後の進路選択における制約

ここではまず、家庭状況が対象者の高校生活と高卒後進路に与える影響について確認しておく。

高校在学時の親子関係において、とりわけその経済的側面にかんして本調査1回目では、親からの小遣いの有無、携帯電話の支払い、そしてアルバイト収入の有無とその使い道を尋ねている。その結果、A高校ではほとんどの場合、携帯電話代は親の支払いとなっているが、B高校ではおおむねアルバイト収入のある場合、自身での支払いとなっていた。そこには両校における家庭階層の影響が強く現れているといえる。また小遣いにかんしては、両校ともアルバイト収入を得ている場合には受け取っていないというケースがほとんどであり、自分の収入でやりくりしていた。

さらに、厳しい家計状況のなかで、高校の学費支払いを含め、高校在学中からアルバイト代を生活費として家に入れている者も確認できただけで8名いる。そのほとんどがB高校出身者だが、A高校出身でフリーターをしている田辺薫の場合も、自営で工務店を営む父親の収入が不安定であり、家計はおぼつかない。そんななかで彼女は、高校2年生のころから部活動と並行してアルバイトをし、部活動引退後は週5日、10万円ほどを稼ぎ、そのほとんどを家に入れていた。最初のころは、「ちょっと借りるから」という程度だったのが、そのうち「大変なんでちょっと入れてほしい」となり、徐々に入れることが普通となっていった(2)。「高校の時は、『なんなの』とか思った」(2)というが、それが普通になってからは、特に何も思わなくなったそうである。そのような家庭において彼女らは、たとえ高校生であってもすでに家計を支える重要な一員となっているのである。

そしてまた、家計状況の苦しさは高卒後の進路選択に際して、選びうる選択肢の幅に大きな影響を与えている。中学以前の段階から、親との「暗黙の了解で」就職することが決まっているようなケース(内田玲奈)もあるし、進学を望みつつも家計の逼迫状況を懸念する兄から「ちょっと今の状況考えろ、無理だよ」(2)と止められ、フリーターとなっているケース(田辺)もある。なかにはいったん進学が決まったにもかかわらず、結局その経費が工面できないままに、フリーターへと至っているケースもある。庄山真紀は、高校3年時には予定進路を調理師専門学校とし、すでに試験まで受けていた。しかしインタビュー時から「お金のめどが経たないんで…」(1)と、経済的な問題に悩んでもいた。教員とも相談し、いろいろと模索したものの、結局進学のための費用は用意することができず、「とりあえず一年考えようと思っ

て」(2)フリーターとなっている。高卒後進路において、とりわけ進学可否は本人の学力以上に、その学費を家庭が捻出できるかどうかにかかっているのである。

(2) 卒業後の生活と移行における制約

高校生活・高卒後進路において、家計状況が強い影響を及ぼしている様子を見てきたが、卒業後の生活においてもこうした制約は続いている。父親は高齢、母親は病気で生活保護を受給している内田玲奈は、高卒後正社員として働いているが、そこでの就労は一日中立ちっぱなしで作業に追い立てられるもので、しかもサービス残業が常態化しており、家に帰ったら寝るだけの日々であった。そして辞めようと思ったり、「何か違う仕事をしたくなる」と思うようなときもあったものの、「でも今働いているのは私だけなんで、家にお金入れないとまずいんで」(2)と、具体的な行動には移していない。

また高校在学時から家計を支えていた田辺薫は、フリーターとしていろいろな仕事を経験するなかで、仕事のみでなく資格や勉強など多方面に意欲的に取り組んでいるが、「やってみたいこと」として挙げられていることのうち、留学やひとり暮らしなど家庭にもかかわる選択肢については、ひとまず家庭が落ち着いてから、という留保がつけられていた。そんな状況に対し、彼女は「今は家にお金入れなくちゃいけないから、きつい言いただけど拘束されてるくらいの勢い」(2)と語っていた。

こうした家庭における制約をもっとも強く背負っているのは、進学資金が用意できずフリーターとなった庄山真紀である。彼女は水商売で働く母親と二人で暮らしており、田辺同様高校在学時からアルバイト収入を家計に充てていた。そして高校卒業後も、アルバイトながら月あたり手取りで18万円ほど稼ぎ、そこから高校在学時の奨学金返済や、家の光熱費の支払いを担うなど、母親と彼女の二人で家計を支えていた。また母親には友達がおらず、「私に対しての執着心はすごい」「頼れるのは私ぐらい」(2)という状態だそうで、彼女は精神的にもかなりの程度、親を支える側に立っているといえる。

そして高卒3年目、母親は交通事故に遭ってしまい、その処理でこれまで彼女が少しずつ貯めてきた貯金まで使い果たしてしまった。さらに保険の交渉もこじれ、彼女はお金を工面するために、かつて一時期働いていた水商売の仕事でふたたび働きもした。以前水商売で働いていた際には、給料のよさはあるものの、精神的にも身体的にもきつく、昼間の仕事に比べ「仕事をしてるって感じ」が得られない(3)、とって辞めた彼女であったが、親の事故という不慮の事態に対してなうすることは、水

商売の仕事で働くことであった。

不慮の事故そのものは避けられないといえるが、彼女の家庭にとって大きかったのは、「お金が、蓄えがない」「頼れる人もいない」「(制度的な支援などについて)知ってる人もいない」(3)など、不慮の事態に対処しうる「溜め」¹⁰のなさ、すなわち貧困である。そんな家庭の貧困状況に深く埋め込まれ、困難に直面している彼女にとって、描きうる将来への希望とは、かつての料理を作りたいという思いではなく、「普通に平和な日々を送りたい」「幸せな結婚」をしたい(3)という思いであった。

(3) 互いに支えあって成り立つ家庭と親子関係

以上のような家庭環境におかれた彼女らの移行について、あらためて親子関係という視座から捉えなおしてみたい。そこにあるのは、「親に甘えている若者」の姿ではないのと同時に、親から独立して個別の生を営む姿でもなく、互いに支えあいながら生活を営んでいる姿である。そうでなければやっていけないという状況に迫られての選択でもあるのだが、一方でそれは、双方向的な支え-支えられの関係に基づく自立の姿を示しているものである。

家にお金を入れなければならない状況に対し、2回目には「拘束されてる」と語っていた田辺であるが、一方で収入の半分を入れている3回目には、「ごめんねって言いながら」「少ないですけどどうぞ、みたいな」(3)という思いを抱いてもいる。そこには、たんに拘束されているという受動的側面のみならず、彼女自身が主体的に家庭を支える側に回っているという側面がうかがえる。それは彼女も含め、家計を親きょうだいに「4人柱」で支えているという状況、家事の大部分を一手に引き受けている母親への感謝などもあるが、とりわけ精神面における支えとして家族が位置づいている点が大きくかわっているといえる。遅くまで働いている彼女に対し、親は帰宅時間を心配して毎日電話をかけてくるものの、仕事についてはあまり聞いてこないという。「たぶん気になってはいるんだろうけど」(3)、自分の方からしゃべるのを待ってけている様子だという。そして彼女が困ったときには、母や兄が話し相手になってくれるそうである。そんな親の彼女に対する接しかたに対し、3回目には「感謝しますね、この年になってはじめてちょっと感じるかな」(3)と答えている。

また、「けっこう自立心高い方」(2)という内田は、家事や身の回りの世話など主に生活面を指して、親に「面倒見てもらってる」「遊ばせてくれている」(3)という面を強調している¹¹が、両親は働いておらず、彼女の収

入は家計にとって大きな位置を占めている。そして親からは「風邪引くな」「お金使い過ぎるな」(3)などといった忠告を受けている一方で、逆にお酒が好きでしょっちゅう呑みにいく父親に対し、彼女の方から「いい加減にしなさい」「呑みに行き過ぎ！」(3)と怒るようなこともあるという。そんな親との関係に対し、「居心地がいいから居座っちゃう」自分を戒めつつ、「いずれはしなきゃいけない」とひとり暮らし＝「自立」の意志を強く持つ彼女(2)(3)であるが、「連携取れてる」「持ちつ持たれつ」(3)と評する現状は、相互的な依存関係を典型的に示しているとも捉えうるであろう。

田辺にしろ内田にしろ、すでに一方的な「親への依存」状態にあるわけではないことは明らかである。しかしながら、彼女らの実態が示している親-子双方に支えあい、頼りあっている状況は、すでに「独立」した両者による関係というよりは、「相互依存」の関係と捉えうるものである。またそれは家庭状況という文脈に大きく規定されたものではあるが、中学生のころから高卒就職を引き受けてきた内田の進路選択や、田辺の家計繰り入れに対する思いにみとれるように、そこには一定の主体的判断・自己統治を伴った「自律」の側面も指摘できるだろう。そしてそこでの「自己」とは個別化された自己ではなく、家族・親との関係も組み込んだかたちでの自己であり、関係性のなかにある自己による統治＝判断であること、いわば「関係的自律」であることが重要である。

(4) 小括

以上本節で見えてきたことは、家計の困難が若者の移行に及ぼす影響力の強さと、その制約という側面であった。そして親子関係に着目すれば、直面している課題はむしろ目の前の生活基盤である家庭をいかに支えるかとなってしまっており、親からの分離・独立ははるか先の話となるか、あるいは親を見捨てて出ていくしかない状態となる。こうした家庭的困難に埋め込まれている彼女らの移行は、まさしく貧困の再生産の過程そのものであり、なんらかの社会的施策が求められてくる。この状況を克服していくためには、貧困状態への対処を家族間でまかなう(「家族主義的対応」)のではなく、公的福祉により保障していく制度的基盤が不可欠である。そして家庭的背景にかかわらず、大人になっていくプロセスを十全に歩んでいけるような状況作りとしての自立＝独立支援の必要性が課題となってくる。

しかし一方で留意しなければならないのは、こうした課題はあくまで公的・社会的な条件整備の問題であり、

その下で実際に人びとがどのように生活を営んでいくかについてまで強要されてはならないという点である。制約の多い家庭状況の下、すでに一方的な「親への依存」期を脱している彼女らが築いている親子関係は、互いに支えあいながら日々の生活を営む「相互依存」関係であった。それは状況に強いられるものである一方、それにより獲得しえている「自律」もある。ゆえに、状況そのものに起因する困難を除いたうえで、あらためてこの相互的關係を取るか取らないかは、それぞれが描く「自立」観によって異なってくるといえる。そのいずれを選ぶにせよ、それぞれがひとつの生活・移行のありかたとして社会的に通用していくような社会文化状況もまた、求められてくる課題であり、そこにこそ、ここで見てきた「相互依存」という生活形態の実情を把握することの意義が見出されるのである。

4 おわりに

以上、移行期の若者における親子関係の様相から本稿で見てきたのは、「自立」を捉えるうえでの「独立」「自律」という概念的に異なった二つの側面であり、また「依存」とは対立していない「自律」のかたちであった。対象者の偏りもあり、今後も検証の余地が大きい、ひとまずこれらの概念について整理し、考察を加えたうえでまとめたい。

まず「独立」が表わしていたのは、親とのあいだの関係における「社会人」としての地位獲得過程であり、それは現状においては「正社員」という「標準」の型に基づくものであった。現行の「標準」をひとまず括弧に入れたうえで「独立」を概念化すれば、一人の社会人としての社会的地位や就労・生活環境など、その人をとりまく状態・状況がどこまで満たされているか、という条件についての指標として機能するものと捉えうるだろう。この「独立」という観点においては、とりわけ家庭の貧困に強く規定されている庄山のケースに象徴されているように、家庭的背景などそれぞれの「属性」に左右されないかたちでの条件整備が主要課題となり、「普遍性」がその要となる。

それに対し「自律」が表わしていたのは、親からの保護・干渉が減り、自主的な判断に委ねられる領域が拡大していくという過程であった。その具体的様相は状況により大きく異なるが、ここで「自律」が意味しているのは、それぞれがおかれた状況下において、いかに主体的にふるまいうるか、という行為についての指標として機能しうるものである。この「自律」の観点においては、

親との価値観の違いが対立を生んでいる下川のケースにあるように、行為についての内実が親の意向や政策など特定の価値観に縛られずに判断できることが主要課題となり、「個別性」がその要となる。

この「独立」と「自律」の両者は、実態としては複雑に絡み合っており、対立的に捉えられるものではない。事実、正社員への入職に際しての親子関係で見たように、社会的な「標準」の型への包摂が現実的に可能なものとして機能している限りにおいて両者は連動し、同時並行しているといえる。しかしその「標準」を親と共有しがたいような社会状況や、「標準」の外部におかれた状態などを考慮した場合には、それらをきちんと腑分けしたうえで「自立」を捉えていかねばならないのである。

こうした二つの視点を元に「自立」と「依存」の関係を問うならば、それは以下のように把握できる。まず従来の調査・研究で据えられてきた「依存から自立へ」という構図に代表される対立的把握は、「自立=反-依存(in-dependence)」という意味で「独立」をめぐる自立課題を指しており、それは社会の側に課される制度的課題といえる。一方で、「自律」においてはかならずしも「依存」は対立概念とはならず、田辺のケースに見るように「相互依存」の関係を糧にしながら果たされる「自律」も成立している。そして「自律」のかたちは各人の価値観・状況により異なってくるといって、「自律」の課題は多様な生活のありかたを受容しうる文化的課題といえる。そしていずれにせよ、若者の親子関係の移行を「依存から自立へ」という構図でのみ捉える視座は、やはり一面的にすぎるのである。

先ほど「独立」「自律」両側面を腑分けして「自立」を捉えていく必要性を述べたが、一方で「反-依存」的な「独立」という側面のみを強調は、個別化された自立観や特定の自立観への強要を孕みかねないし、逆に相互依存的な「自律」やその多様性のみを強調は、さらなる家族主義の強化や社会保障の削減を進めてしまう。あくまでこの両者をともに見据えたうえで、若者の移行は捉えられていく必要があるのである。

註

1. 「自立」を冠した施策・法律としては、「ホームレスの自立等に関する特別措置法」(2002年)、「若者自立・挑戦プラン」(2003年)、「生活保護自立支援プログラム」(2004年)、「障害者自立支援法」(2005年)などが挙げられる。そこで用いられている「自立」観についての一面性、抑圧性については、現代思想の特集(2006)、中西(2007)など参照。

2. とりわけ若者の親子関係に着目して実施された調査としては、北村(2001;2001年調査)、岩上(2005;2001年~2003年調査)、家計経済研究所(2005;2003年調査)などが挙げられる。
3. なお、宮本を座長とする「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会」による報告(内閣府2005)では、「自立の在り方は一様ではない」とされているものの、やはり親への依存状態は脱すべき状態とされ、「親からの自立」が目指されている点に変わりはない。また「責任ある個人として」「独立した個人として」というように、「個人」が強調された「自立」観となっている。
4. 調査項目の設計にかんして、「自立」は「20代未婚者の属性」に区分されているのに対し、「頼る／頼られる」は「親子関係の現状」として区分されている。
5. また一方、この「自立」観にかんしては、障害者による「自立生活運動」のなかで提起されてきた問いも参考になる。そこではそれまでの経済的自立や身辺自立を基本とした「自立」概念に対し、「自己決定」を獲得し生活主体となることが目指され、「自立」概念の刷新が行なわれた(定藤1993)。それは家族や施設からの「独立」を指すという意味で「自立生活(Independent Living)」だが、「自己決定」という意味において「自律」の獲得である。そしてここでの「自律」とは、介助者など他者の存在を組み込んだかたちでの「自己決定」であり、その「他者性」をめぐる両義性や揺らぎを孕みつつも、私的所有権的な自立観とは対極をなす「自立」観である(星加2001)。
6. 職業的移行に困難を抱えた若者たちに特化して行なわれた聴き取り調査である労働政策研究・研修機構の調査では、宮本により親子関係についての詳細な分析も行なわれており、貴重である(宮本2005)。しかしここでの分析の主眼はあくまで職業的移行の困難に及ぼす家庭環境要因の析出にあり、親子関係の移行は主要な対象となっていない。またこの調査は、一時点における聴き取りにすぎず、まさに移行に困難を抱えた者に伴いがちな複雑な過程を追いきれていないという制約もある。
7. 一方で、進学者における親子関係にも深刻な対立・葛藤が確認できる。それらについては、乾ほか(2005;pp.113-115)および乾編(2006;第6章)参照。
8. 横行するサービス残業やずさんな衛生管理、きちんとした研修もなくベテランパートを指揮する側に立たされる状況や、人格否定を伴うような上司の指導、そして不安定な経営状態など。またこの会社での就労経験は、仕事がうまくできずに怒られることへの恐怖感を彼女に生起させ、他の仕事をする際にも影響を及ぼすような経験となっているという。
9. 家族関係との対比も含め、彼女らフリーターの生活をかろうじて支えている友人ネットワークの機能にかんして、乾・西村(Inui&Nishimura2007)参照。ここに見られるような友人ネットワークの機能と、結婚による新たな「家族」(=相互依存関係)形成がどのような関係として位置づくのかについては、今後の調査および分析を待ちたい(ちなみに下川はその友人を「恋人」と形容し、その友人は下川を「きょうだい」「家族」と形容する)。
10. 湯浅(2007)参照。湯浅は貧困状態をたんに経済問題のみでなく、「外からの衝撃を吸収する働き」と「栄養源としての働き」をもつ「溜め」の欠如として捉えている。「溜め」にはさまざまあるが、とりわけ重要なものとして「金銭の”溜め”」「人間関係の”溜め”」「精神的な”溜め”」が挙げられている。
11. 家事や身の回りの世話を親に任せていることにかんしては、彼女の職場における長時間労働が大きいかかわっており、かならずしも彼女自身の問題ではない。

参考文献

- 江口恵子 1966「依存性の研究」『教育心理学研究』14号
- 現代思想 2006「〈特集〉自立を強いられる社会」『現代思想』2006年12月号
- Holdsworth, C. & Morgan, D. 2005 *Transitions in Context; Leaving Home, Independence and Adulthood*, Open University Press
- 星加良司 2001「自立と自己決定—障害者の自立生活運動における『自己決定』の排他性—」『ソシオロギス』25号
- 乾彰夫・上間陽子・木戸口正宏・椎林美樹・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・宮島基・芳澤拓也・渡辺大輔 2003「共同研究」『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究」東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第20号
- 乾彰夫・新井清二・有川碧・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔 2005「“高校卒業1年目”を生きぬく若者たち」東京都立大学人文学部『人文学報』359号
- 乾彰夫・安達眸・有川碧・遠藤康裕・大岸正樹・児島功和・杉田真衣・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔 2007「明日を模索する若者たち：高卒3年目の分

- 岐」東京都立大学・首都大学東京教育学研究室『教育科学研究』第22号
- 乾彰夫編、東京都立大学「高卒者の進路動向に関する調査」グループ著 2006『18歳の今を生きぬく』青木書店
- Inui, A. & Nishimura, T. 2007 "The only certainty in my future is that I'll ever be chatting with her": Social Capital/ Network for Disadvantaged Young People's Transitions, *Educational Studies in Japan*, Vol.2
- 岩上真珠（研究代表）2005「少子・高齢化社会における成人親子関係のライフコース的研究」平成13~16年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書
- Johnson, F. 1993 *Dependency and Japanese Socialization*, New York University Press (江口重幸・五木田紳訳『「甘え」と依存—精神分析的・人類学的研究—』弘文堂、1997年)
- 家計経済研究所編 1994『『脱青年期』の出現と親子関係—経済・行動・情緒・規範のゆくえ』
- 家計経済研究所編 2005『若年世代の現在と未来』国立印刷局
- 北村安樹子 2001「成人未婚者の離家と親子関係」『LDI report』128号、2001年7月
- 宮本みち子 2004『ポスト青年期と親子戦略』勁草書房
- 宮本みち子 2005「家庭環境から見る」小杉礼子編『フリーターとニート』第3章、勁草書房
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997『未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣
- 内閣府 2004「青少年の社会的自立に関する意識調査」平成16年6月
- 内閣府 2005「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」平成17年6月
- 中西新太郎 2007『『自立支援』とは何か—新自由主義政策と自立像・人間像』後藤道夫・吉崎祥司・竹内章郎・中西新太郎・渡辺憲正『格差社会とたたかう—〈努力・チャンス・自立〉論批判』第4章、青木書店
- 定藤丈弘 1993「障害者福祉の基本思想としての自立生活理念」定藤丈弘・北野誠一・岡本栄一編 1993『自立生活の思想と展望—福祉のまちづくりと新しい地域福祉の創造をめざして』ミネルヴァ書房
- 湯浅誠 2007『貧困襲来』山吹書店
- 渡邊恵子 1990「自立の概念化の試み」『日本女子大学紀要 人間社会学部』1号